

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02581

研究課題名(和文)機能文法による日本語モダリティ研究

研究課題名(英文)A Systemic Study of the Modality of Japanese

研究代表者

角岡 賢一 (Kadooka, Kenichi)

龍谷大学・経営学部・教授

研究者番号：70278505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：今回の共同研究者五人による成果として、2016年12月にくろしお出版から公刊された『機能文法による日本語モダリティ研究』を挙げる事ができる。これは機能文法による枠組みで日本語モダリティ体系を分析したものである。本書は、研究史から理論・応用へと一貫した章立ての元にモダリティ研究史を踏まえながら日本語モダリティ体系を明らかにするように努めた。モダライゼーションの下位区分としては、能力性・証拠性・蓋然性・通常性という四つを立てた。モジュレーションの下位区分としては、必要性・義務性・許可性・期待性・志向性という五つを立てた。

研究成果の概要(英文)：The main purpose of this paper is to contrast the definitions of the modality systems of English and Japanese. Since the definitions and the subclassifications of modality are different from one researcher to another, the descriptions depend on the framework. In this paper, the Systemic Functional framework is adopted as the main one that the modality system does is to construe the region of uncertainty that lies between 'yes' and 'no.'

Another way of the definition is from Lyons (1977: 452): the purpose of the use of the modality expressions is to express, parenthetically, speaker's opinion or attitude towards the proposition that the sentence expresses or the situation that the proposition describes.

研究分野：言語学

キーワード：モダリティ 選択体系機能言語学 モーダライゼーション モデュレイション

1. 研究開始当初の背景

本研究では、選択体系機能言語学(以下「機能文法」と称します)の枠組みに基づいて日本語モダリティを分析します。機能文法では、モダリティをモダライゼーションとモジュレーションに二分します。本研究の目的は、モダライゼーションの下位分類として能力性・蓋然性・通常性という三つ、モジュレーションについては義務性・必要性・許可性・期待性・志向性という五つを区別することです。目的の第二は「のだ、わけだ、ものだ、ことだ」に関してです。日本語学のモダリティ研究では、これらを説明モダリティと位置づけしてきました。本研究では、異なる分析をします。このような説明表現を叙法構造で位置づけますが、モダリティとは別の範疇です。機能文法という枠組みで日本語を分析した先行研究としては、Teruya (2007) *A Systemic Functional Grammar of Japanese* が最も重要な文献であろうと考えられます。本研究はこの先行研究を出発点として日本語のモダリティ体系を精査し、機能文法として独自の視点を打ち出すことが目的です。機能文法の枠組みではモダリティは「肯否極性の中間に位置する」というように定義されています。この定義からして、次に見るような日本語学の観点と大きく異なっています。

他方で、日本人研究者による日本語モダリティ分析は山田文法以来の蓄積において見るべきと考えています。英語のモダリティ分析と比べてみると、一つは英語と日本語における語順の相違、もう一つは日本語で「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」など説明という表現をどう位置づけるかで分析が大きく異なってくるものと考えられます。また日本人研究者による先行研究では、命令や疑問など「叙法構造」として位置付けるべきものをモダリティと扱っている場合が多いと考えられます。例えば宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『モダリティ 新日本語文法選書4』では、日本語モダリティを三つに下位分類しているうちの一つが疑問、さらに実行という範疇の下に命令・依頼を置くという枠組みが提示されています。これは、叙法とモダリティが未分化であるという基本的な全体像構想段階での相違を反映しているものと考えています。

2. 研究の目的

本研究における研究目的として、モダリティの下位分類であるモダライゼーションとモジュレーションを日本語において定義することを第一とします。第二に、野田晴美(1997)『の(だ)の機能』・益岡(2007)『日本語モダリティ探求』などで「説明モダリティ」と括られている「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」という類を機能文法としては叙法で位置づけるという目標を立てます。

Halliday and Matthiessen (2014:177)では、モダライゼーションについて次のように説明されています(引用者訳)

(肯否極性の)中間に二つの可能性がある。一つは「おそらく、たぶん、きっと」という蓋然性の度合いである。二つ目は「時々、普通は、いつも」という通常性の度合いである。(中略)厳密に言えば「モダリティ」という用語が属するのは、この蓋然性と通常性という度合いである。これらをより細かく位置付けて区別するために「モダライゼーション」と呼ぶことにする。

ここで注目すべきは、「蓋然性と通常性が狭義のモダリティである」と説明されている点です。

次にモジュレーションですが、「モジュレーションとは提言(proposal)に関わる。肯定の提言とは命令(prescribing)であり、否定とは禁止(proscribing)である。肯定と否定の中間に位置するのが、義務性と志向性である」という旨の定義が上掲書でなされています。

このように、英語におけるモダライゼーションとモジュレーションは極めて簡潔な定義によってそれぞれ二つの下位分類が設けられています。

モダライゼーションの下位分類として能力性(できる)・蓋然性(はずだ)・通常性(こともある)・モジュレーションについては義務性(しなければならない)・必要性(する必要がある)・許可性(してもよい)・期待性(すればいい)・志向性(するつもりだ)を立てています。

機能文法においては「肯否極性の中間に位置するのがモダリティである」と定義されますから、「のだ、わけだ、ものだ、ことだ」というように話者の説明という意図を表す言い方はモダリティには該当しません。これらは、叙実という範疇に括ります。機能文法による叙法構造の全体像を示すのが、将来の目標です。

3. 研究の方法

第一段階として、日本語以外の言語でモダリティがどのように研究されてきたかを先行研究を通して概観してみます。ここではまず、主として飯村龍一研究分担者によってF.R.パーマー等のモダリティ理論がどのように構成されているか全員で検証します。この段階では「義務性」(deontic)と「蓋然性」(epistemic)という二項対立が中心になるものと予想しています。

これと平行して、日本語の意味論と語用論という立場からの分析を加えていきます。これについて主たる担当は五十嵐海理研究分担者です。同研究員は語用論が研究の中心ですが、モダリティが意味論と語用論の境界に位置するという観点から、この点を分析するには最適任であると考えています。

平成24(2012)から二年間龍谷大学国際社会文化研究所において共同研究を行った成果として、同研究所叢書として日本語モダリティ分析についての研究書を平成28(2016)年3月に刊行予定です。原稿を完成させるの

は平成 27 (2015) 年 9 月を予定しています。本研究はちょうど同書刊行に向けた時期と重なります。同書の構成は、以下のような章立てと分担で構想しています。

・第一章 F.R.パーマーを中心とした英語モダリティの先行研究紹介 飯村龍一(研究分担者)

・第二章 ハリデー文法による英語モダリティ分析の枠組み紹介 福田一雄(研究分担者)

・第三章 日本語学でのモダリティ分析について 五十嵐海理(研究分担者)

・第四章 肯否極性から出発する枠組みの日本語モダリティ分析適用 加藤澄(研究分担者)

・第五章 モダライゼーションとモジュレーションの下位分類 角岡賢一(代表)

この章立ては本研究が拠って立ち、また同時にその延長線上にある叙法体系という全体像を明らかにするために不可欠の要素です。本研究の研究費によって、各章を執筆した原稿を読み合わせて一冊の本として統一を図ります。このような章立てによって、日本語叙法構造におけるモダリティの位置づけを分析していきます。

この年度に講演会講師として招聘したいのは、香港理工大学の照屋一博氏です。同氏は研究目的の項で挙げた Teruya (2007) の著者であり、機能文法の枠組みで日本語を分析するうえでは同書は必読と言えます。しかしながら頁数の限られた著作では細かい点まで盛り込むことはできず、日本語モダリティ分析においても直接に質問をしたい事項が多々あります。二泊三日程度の日程で日本に招聘し、これら疑問点を明らかにして本研究推進に役立てたいと考えています。

平成 28 (2016) 年度

研究二年目として、モダリティから叙法構造を全体的に俯瞰するという面に重点を移していきます。その経過段階として好適であると言えそうな対象が、説明「モダリティ」についてです。「説明モダリティ」というのは、例えば「私のなかを吹き抜ける風が書いたのだ。「私」がそれを書いたのではない」(益岡 (2007: 87)) における「のだ、のではない」のような表現です。『日本語文法事典』では、次のように定義されています。

「説明」とは、事物について十分に理解できていない(あるいは、そう推測される)聞き手や

読み手に対して、その理解を助けるために行われる言語行動である。

日本語学では、このような「説明」という範疇をモダリティと位置付けることが主流でした。日本語学でモダリティ研究史をさかのぼれば、寺村 (1984) では「説明のムード」という一節を設けていました。このような説明表現には「のだ、わけだ、ことだ、ものだ」というように抽象化された形式名詞が中心

になっていたという特徴が見られます。また「ことなのだ、わけなのだ、ものなのだ」というように重複して「説明する」という意図を強調する表現もあります。角岡 (2014、2013、2012)、Kadooka (2014) ではこれらについて考察しましたが、機能文法の枠組みに基づいて再解釈すると新たな展開になることが予想されます。

二回目の講演会で講師として想定しているのは、英語と日本語のモダリティ体系を研究対象としている澤田治美・関西外国語大学教授です。同教授の分析では、日本語に「説明モダリティ」を組み入れていません。主としてその点を中心に、日本語モダリティ分析における本研究との異同を探っていきたいと考えています。

平成 29 (2017) 年度

最終年度は、研究目的の項で示した選択体網にある叙法構造全体についての分析を対象を広げる予定です。この年度における研究課題として、例えば機能文法の枠組みでは対人メタ機能における叙法構造を挙げることができます。機能文法においては、節を叙法 (Mood) と残余部 (Residue) とに二分します。機能文法が出発点としている英語の分析においては叙法部は主語 (Subject) と定性 (Finite) によって構成されるため、平叙文においても慰問文においても叙法部は連続した語順で繋がります。英語と語順の異なる日本語において、叙法部と残余部の定義を準用した場合にどのような分析になるのかというのは多くの実例日本文から検証する必要があります。一例を Teruya (2007: 195) から挙げておきます (主語 (Sub)、附加詞 (Adjunct)、述語 (Predicate) は Teruya (2007) における用語です)。

僕もいろいろと話したいし、君にも話してほしい。(「僕も」: 主語、「いろいろと」: 附加詞、「話したいし」: 述部、「君にも」: 附加詞、「話してほしい」: 述部)

この分析では述部は、これ以上の分析をしていません。英語のモダリティ分析においては助動詞や本動詞というように時制を担う語彙範疇を定性と括り、主語と一体となって叙法部を形成すると説明されてきました。これを日本語叙法構造と比較してみると、英語においては主語の後に定性を担う助動詞または本動詞が続くために叙法部が一体となるのに対して日本語は主語 (主語の存在そのものが日本語においては必須ではないため、主語がない文も多く見られます。また「は」で示される主題が節頭に位置する場合も多く見られます) と述部が節の頭と末部に分離される場合が多くなると推察されます。このような語順の違いから、日本語と英語において叙法構造の相違を詳細に比較する必要がありそうです。

この年度で講演会で講師として、仁田義雄・大阪大学名誉教授を想定しています。同

教授は、日本語学の伝統線上でモダリティ等を考察してこられました。最終年度で再度、日本語学の立場と機能文法の分析における異同について比較してみます

4. 研究成果

今回の共同研究者五人による成果として、2016年12月にくろしお出版から公刊された『機能文法による日本語モダリティ研究』を挙げることができる。これは上述のように機能文法による枠組みで日本語モダリティ体系を分析したものである。五人による分担は以下のものであった。

第一章 飯村龍一 担当 機能文法による日本語モダリティ分析に向けて

第二章 五十嵐海理 担当 陳述論の系譜とモダリティ

第三章 福田一雄 担当 機能文法での叙法体系・モダリティの定義

第四章 角岡賢一 担当 機能文法による記述体系

第五章 角岡賢一 担当 モダライゼーションとモジュレーションの下位分類

第六章 加藤澄 担当 テキスト分析の中で対人的言語資源を考える

第七章 角岡賢一 担当 結び

このように本書は、研究史から理論・応用へと一貫した章立ての元にモダリティ研究史を踏まえながら日本語モダリティ体系を明らかにするように努めた。モダライゼーションの下位区分としては、能力性・証拠性・蓋然性・通常性という四つを立てた。モジュレーションの下位区分としては、必要性・義務性・許可性・期待性・志向性という五つを立てた。更に特筆すべきは、叙法体系として選択体系網によって全体像を示したことである。選択体系網というのは機能文法独特である図示で、これによって複雑な体系を一枚の図に納めることが可能である。叙法構造全体となると、状態か呼称かという選択に始まって、モダリティは六箇所ほどの選択を経て図では右端に置かれるそれは即ち、モダリティというのは叙法構造全体から眺めるとほんの一部に過ぎないという事実を視覚的に明示しているのである。このようにモダリティ及び叙法構造を捉えることができたのは成果である。

また今回の課題「日英語の叙法構造分析」に直接に関わる論文として、『国際社会文化研究所紀要第十九号』所載予定、研究代表者である角岡賢一の「A Contrastive Study of the English and the Japanese Modality Systems」を挙げる。日本語のモダリティ体系は上掲書の枠組みによっている。英語のモダリティ分析は MAK Halliday and Christian Matthiessen (2014), Halliday's Introduction to Functional Grammar を参照している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 十八 件)

[1] 角岡 賢一 「節談説教の談話構造分析」 龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報第 27 号、pp.57 - 69、2018 年、査読有り。

[2] 角岡 賢一 “An Acoustic Analysis of the Rakugo Story Kusshami Koushaku” 龍谷紀要 第 39 巻 第二号 pp.13-31 2018 年、査読有り。

[3] 角岡 賢一 「機能文法による日本語モダライゼーションとモジュレーション下位分類の分析」 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第十九号、査読有、pp. 105 - 119、2017 年 6 月、査読有り。

[4] 角岡 賢一 「上方落語に見られる軽蔑語の実例」 『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第二十六号 2017 年 3 月、査読有 pp. 95 - 114、査読有り。

[5] “A Brief History of Kamigata Rakugo up to 1800.” KADOOKA Ken-ichi The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences. 39, 1. 2014, pp. 1 - 17 査読有

[6] 飯村 龍一 「ビジネスリーダーの経験を解釈構築する シャープの経営戦略テキストの事例分析」 『論叢 玉川大学経営学部紀要』第 26 号 2017 年 1 月 pp.17-43 査読有

[7] 飯村 龍一 「モノづくり中小企業経営者のディスコース分析にむけて」 『論叢 玉川大学経営学部紀要』 査読有 第 27 号 2017 年(近刊)頁数未定

[8] 飯村 龍一 「物語テキストにおける問題解決プロセスの定式化にむけて 問題解決者としての主人公を中心に」 LEORNIAN 日本英語教育英学会 21 号 2017 年(近刊)頁数未定、査読有

[9] 飯村 龍一 「物語テキストにおける感情表現分析」 LEORNIAN 日本英語教育英学会 22 号 2017 年、査読有

[10] 福田 一雄 「日本語モダリティ覚え書き(その三)モダリティにおけるメタファーと半メタファー」 『言語の普遍性と個別性』新潟大学現代社会文化研究科 第 8 号 2017 年 3 月 pp.1-14. 査読有

[11] 「機能文法に基づく日本語モダリティの分類」 福田一雄 『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 19 号、査読有 pp. 149 - 164

[12] 五十嵐 海理 「否認」の語法研究」 『英語教育』(大修館書店)2017 年 11 月 pp. 23-25. 招待寄稿、査読有り。

[13] Cognitive Empathy Deficit in Adolescents and Adults with Autism Spectrum Disorder as Identified from their Narrating Stories. ”加藤澄 *Journal of Systemic Functional Linguistics* 第 9 号、査読有 2017

[14] A Cross-linguistic Study of Types of

Jokes 『龍谷紀要』 角岡賢一 第 38 巻一号
2016 年 9 月 pp. 35 - 50、査読有り。

[15] 飯村 龍一「物語テキストにおける会
話ユニットのはたらき テキスト構築の視
点から」LEORNIAN 日本英語教育英学会
20 号 2016 年 pp.3-22、査読有り。

[16] 「機能文法による日本語叙法体系分
析」角岡 賢一『龍谷紀要』第 37 巻第 2 号
pp. 37-53 査読有 2016 年 3 月、査読有り。

[17]「節談説教の文化的研究」角岡 賢一『龍
谷大学グローバル教育推進センター研究年
報』第 25 巻 pp. 103-116 2016 年 3 月、査
読有り。

[18] 加藤澄・著『サイコセラピー臨床言語
論』の書評 福田一雄 「図書新聞」(第
3274 号) 第 4 面 2016 年 10 月 依頼有、
査読有り。

〔学会発表〕(計 八 件)

[1] A Linguistic Application of Phonetics
and Phonology to Language Education.
角岡 賢一 多言語教育環境における第二言
語習得・教育学会, 2018 年

[2] A Linguistic Application of Phonetics
to Language Education. 角岡 賢一
第三回教育・文学・言語学学会 2017
年

[3] A Contrastive Study of the Modality
Systems of English and Japanese. 角岡
賢一 European Systemic Functional
Linguistics Association. 2017 年

[4] A Systemic Analysis of the Modality
Systems of English and Japanese. 角岡
賢一 The 23rd International Symposium
of the Theoretical and Applied Linguistics.
2017 年

[5] Acceptance of Anton Marty's
Semantics in Japan, 角岡 賢一 ヘン
リー・スイート協会年次大会 2016 年

[6] A Systemic Analysis of the Modality
Systems of English and Japanese. 角岡
賢一 Linguistic Association of Canada
and the United States 2016 年

[7] An Empirical Study of Typology of
Jokes 角岡 賢一 Linguistic Approach to
Funniness, Amusement and Laughter
2016 年

[8] A Study of Japanese Modality using a
Corpus 角岡 賢一 第八回コーパス言語学
学会 2016 年

〔図書〕(計 四 件)

[1] A Linguistic Study of Kamigata
Rakugo Stories. KADOOKA Ken-ichi 単
著、松柏社、179 頁

[2] 五十嵐 海理 朝倉書店 第 6
章「否認における言語表現の選択と解釈」分
担執筆、中島信夫(編)『発話の解釈はなぜ多
様なのか コミュニケーション能力の働き
を考える』2017 年 3 月 20 日、23-25 頁。

[3] 『機能文法による日本語モダリティ研究』

くろしお出版、2016 年 12 月 16 日刊行、326
頁 角岡 賢一編著

角岡 賢一 執筆分担は第四章と第五章、飯
村 龍一は第一章、五十嵐海理は第二章、福
田一雄は第三章、加藤澄は第六章

[4] 加藤 澄 明石書店『サイコセラピー臨
床言語論』単著、2016 年 4 月 25 日刊行、336
頁

〔産業財産権〕

出願状況(なし)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(なし)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者
角岡 賢一 (KADOOKA Kenichi)
龍谷大学・経営学部・教授
研究者番号：70278505

(2)研究分担者
福田 一雄 (FUKUDA Kazuo)
新潟大学・名誉教授
研究者番号：80143741

加藤 澄 (KATO Sumi)
青森中央学院大学・経営学部・教授
研究者番号：80311504

飯村 龍一 (IIMURA Rryuichi)
玉川大学・経営学部・教授
研究者番号：80266246

五十嵐 海理 (IGARASHI Kairi)
龍谷大学経・社会学部・教授
研究者番号：30329338